

中世・草戸千軒探検 ⑬

か
～書く～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、

人々の生活の様子を紹介しています。

今回は「暖める」でしたが、今回はコミュニケーションに重要な役割を果たす文字に関する資料を、「書く」のコーナーに探ってみます。

さまざまな情報を伝達し、人間相互のコミュニケーションを行う上で、文字は重要な役割を果たしています。文化の継承・発展は、文字によって支えられてきたといっても過言ではないでしょう。

中世には民衆の生活文化が開花し、その後の日本の伝統的な文化の形成に大きな影響をおよぼしています。その背景には、文字の読み書きが広範な階層の人々へと普及したことがあったと考えられ、草戸千軒町遺跡の出土資料からも、そのことが裏付けられます。



(左)「木之庄の油」を二百十文で購入し、^{うご}卯年の十一月十八日から使い始めたことを記した木簡（表と裏）

(右) 市場における木簡の使用例



呪文を記した土師質土器の椀



亀の文様を描いた石製の硯

草戸千軒の町に暮らす人々が、日々の生活で文字を書いていたことを具体的に示す資料が木簡です。木簡は、木の札に墨で文字を記したものです。遺跡からは、商品の取り引きや^{もっかん}銭の貸し付けに関するメモを書き記したものが数多く出土しています。こうしたメモ書きは、当事者が短期間の覚え書きとして記したものと考えられます。紙に書かれた文書が、正式の記録として長期にわたって保管されたのとは対照的で、いわゆる古文書としては伝えられなかったような内容が記されています。そのため、中世における商業・金融業の実態を示す貴重な資料として注目されています。

また、土器や陶磁器に文字が記されたものも出土しています。人名や花押(サイン)が記されたものは、器の所有を示すものとも考えられますが、まじないに関する^{じゅもん}呪文が記されたものもいくつか見つかっています。

一方、文字を書くための文房具として、墨をするための^{すずり}硯や、硯に水をたらす^{すいてき}水滴が出土しています。硯の多くは石でできたものですが、土器の硯や石鍋の破片を転用した硯なども出土しています。

このように草戸千軒町遺跡の出土資料は、中世の人々の生活が、文字と深く結びついていたことを示しているのです。

(主任学芸員 鈴木康之)